

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年  
**8月号**  
通巻564号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成29年8月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷 監  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



奈良県川上村「御船の滝」にかかる虹 奈良市 井手 泉さん撮影(文・8頁)

## 大倭会文化講演会報告【第4回 最終回】

### われわれはどこから来て、どこへ行こうとしているのか？

#### 「この星に生き続けるための物語」

#### 質疑応答

講師 関野吉晴氏  
関野 野吉晴氏

平成28(2016)年11月12日(土)  
大倭拝殿にて

★質問…旅の中で寝込んだり、体調を崩すことは？

関野 一番辛かったのはパタゴニア発でアルゼンチンからチリに一人で自転車で旅をしている時で、周り全部が雪壁で囲まれた中を自転車を押し歩いて三十キロ山越えました。自転車が邪魔でしようがない。やっと人家に着いた時、三十九度以上熱が出ておたふく風邪でした。薬も無くじっと我慢している以外なく、心細いし結構大変でした。

あとはウィルス性の疾患やマラリアです。マラリアに罹った時は潜伏期が一月くらいあって、日本に帰ってきてから自分ですぐわかりました。医学生の際で、治療の為に自分の大学(横浜市大)に行ったら実験動物扱い(笑)。熱型を取りたいというので薬が貰えない。熱帯熱は悪性で死ぬことがあるんですね。三日熱は四十八時間ごとに発作が起きてもう一つは卵形型です。僕は四日熱という日本で五百人に二人くらいの特異な熱で、我慢出来ずにマラリアばかり五百例以上見ていた東大の先生がいる医科研に、薬くださいって飛び込みました(笑)。そ

うしたらうちに入院しない？といわれ僕は横浜市大と東大の奪い合いになったけど、単位の関係で横浜市大に戻って入院しました。それまで寄生虫学教室でもマラリアなんて罹るやつはいるまいと思われて、プレパラート(※顕微鏡観察用試料)がないから教えられてなかったんですが、全員一枚ずつプレパラート用にたつぷり血を採られて、僕の方が担当医に薬の飲み方を教えました。

ところが僕の身体に入ったのはマラリア原虫ではなく肺吸虫とアメリカ鉤虫という十二指腸虫もでした。一ミリくらいで腸にひっかかって血を吸うんです。マラリアの薬がきつくて肺吸虫もアメリカ鉤虫も死んじゃって、こんな例はないと彼らは学会で症例発表し得点をあげました(笑)。南米通いをしている時は二回に一回は寄生虫を貰います。彼らと同じ物を食べてるからしょうがない。日本に帰ったら出せばいいので。

★質問…旅では先人達がどんなことを考えて歩いてたかを感じたかったということについて。

関野 昔の人は五感を使っています。自然と共生している人にとつて、月は形が変わっていくし、それによって暮らしも全然違う。新月で曇っているのは目の前十センチは漆黒の闇です。現在、漆黒の闇は結構な山奥に行かないと経験出来ない。

「新グレートジャーニー」で日本人のルーツを辿る旅をした時は、インドネシアから島影と星だけを頼りにコンパスやGPSを使わず航海しました。五感を研ぎ澄まさないといけないんです。例えば海の深さは水の色でわかります。最初は群青色で、濃い青が緑がかり、エメラルドグリーンが濃くなって遠目に珊瑚礁が見える。最初は五万分の一、二十万分の一の海図を使っていたけど、島や山を見て自分達がどこにいるかわかるので詳細

な地図をやめました。昔の人は隣島に渡ろうとしてたから地図はいらない。僕らは最低限の四百万分の一の地図を使い、あとは五感だけを頼りにナビゲーションしました。

この旅は海上ルートで日本人がやって来たことを証明するのではなく、太古の人に思いを馳せる為にやりました。太古の人はどんなことを感じながら、どんなことに大変な思いをしたのだろうか。誰がどんなことを考えるのだろうか。それがやはり自分の由来に繋がると思うんですね。

昔の人達も薪の火にあたりながら、俺達これからどうなるんだろうねとか、俺達は他の動物達、特にサルとどこが違うんだろうねとか、考えていたのではないか。そういう面では昔も今も考えることには普遍性があると思います。

まあ大体そんなに高尚なことは考えないです。今日はどこに泊まれるか、何が食べられるのかとか。形而上学的なことじゃなく低次元なことばかりです(笑)。

★質問…生死に関わる究極の判断が迫られた時、何を基点に判断をくだしたのか。

関野 判断を下す時は、生きるか死ぬかです。僕の判断基準は死は怖い、死にたくないです。グループの場合とは少し違って、一人だと無理する。自分は運がいいから大丈夫とか(笑)。グループでは人の命を預るので判断が非常に厳しくなります。

それで、海の旅の二年目でフィリピン北部まで行ってた時のことですが、ルソン海峡は、ルソン島から台湾の間まで四百キロの厳しい海峡です。国境警備隊の司令官は六月までに渡れないなら止めた方がいいという意見でした。ここでクルー達の意見が割れた。インドネシア人は皆行きたい。

僕も行きたい。武蔵野美術大の卒業生も行きたくしょうがない。ただ一人海に詳しい安全担当者だけが止めた方がいいという意見でした。最終的には全て僕に判断が任せられました。安全を優先すれば五十%以上、出来れば八十%以上の生の確率が必要なので諦めました。死なないということが一番大切です。

それで可哀想だったのは、五十歳のインドネシア人のキャプテンです。東日本大震災の津波の来た日に、それと全く関係ない話ですが、朝釣り行って亡くなりました。金曜日から礼拝にくるはずなのに帰ってこない。探しに行ったら船が漁礁に繋がりが弁当はそのまま本人だけがいないかった。心臓が脳に発作が起きて、海に落ちたと思うのですが、急死しました。彼は日本で新幹線に乗ることを一番楽しみにしていました。キャプテンとして乗り込むには、日本に着くことをイメージして初めて出発出来るらしく、彼は血走って行きたがっていた。あの時、諦めた為に亡くなったわけはないですが、本当に済まないと思ってます。

★質問…縄文時代は寒暖の差がありながら非常に長く続いたという。どう生きていたのか。

関野 縄文時代は約一万年続いて、その頃の米は陸稲です(水田があったという人もいる)。青森県の三内丸山では粟、ヒエ、粟や雑穀を栽培しています。新宿の百人町で、一万四千年前の旧石器時代の古い土器が見つかりました。縄文時代の火焰土器で、日本の誇るべき文化だと思います。九州の上野原遺跡ではどんぐりをさらす水路も見つかっている。ただ縄文が密集しているのは関東から北の方が多い。関東的那賀川は鮭が上ってます。鮭は凄い魚で燻製にすれば一年持ち、二カ月あれば一年分の食料が獲れる。水産物と粟まで栽培す

れば楽に生きられる。縄文は文明だと思つてます。勿論、平均寿命は二十歳以下だし、そんなに楽でもない(笑)。ただ赤ちゃんの死亡率が高いと平均寿命は下がります。戦前の日本は乳児死亡率は四人に一人です。三人誕生し二人が百歳生きても、一人死ねば平均年齢は六十六歳なので、平均寿命で語ると本質が見えないところがあります。

★質問(教員)・・・教育現場で自然から学んでいくことが益々少なくなっていることについて。

関野 学生から旅と一緒に連れていって欲しいと言われてもずっと断ってきました。若いうちは一人で旅をした方が良く、事故が起こったら困る。けれど海の旅の時は勿体ないと思つたんです。学生は親から預かっているけど、卒業生は一応社会人とみていいことにしました。

シーカヤックでは面白くないので、インドネシアの舟を再現したかったんですが、熱帯だから木や竹が腐っていて残ってない。自然から素材をとり自分で道具から作るのに、まず鉄を作らなければと、最初に奈良県東吉野の刀鍛冶に相談に行きました。日本では唯一出雲にたたら製鉄があつて、日本刀は出雲の玉鋼で出来ています。神戸製鉄や新日鉄では出来ない。東吉野の刀鍛冶に出雲の棟梁を紹介してもらおうと思つたら、東京でやるならと東京工大の金属の先生を紹介され大学の金属工房でやることになりました。

何キロくらいの道具を作るの?と聞かれ、五キロと答えると、ならば砂鉄百二十キロ集めて、炭三百キロ焼いてくれと言われました。砂鉄は江の島や湘南ではチタンや硫黄など不純物が混ざつて駄目で、九十九里に通つて百五十キロ集めました。それで東京で炭を焼こうと思つたら杉檜だらけで、炭にしても軽すぎですぐ燃えてしまうから、

たたらには向かない。雑木はあるけど、簡単には集められないので、結局岩手で炭焼きしました。三百キロの炭に松三トンです。五キロの工具の為に三トンの森林伐採。鉄の歴史は森林伐採の歴史なのだとかかります。

今の現役の学生への課題はカレーライスです。ラーメンでもピザでも何でも良かったけど、大切なのは一から作つて気づくことです。器、米、野菜、スパイス、全て一から作る。

ビーフカレーを作るなら牛を飼えと言つたんですが、無理だったので去年は駝鳥を飼いました。駝鳥はストレスに弱く引越しも騒音も駄目で、家畜化すると五匹に一匹生き残る。予算の関係で三匹しか飼えず全部死んで、結局ホロホロ鳥と烏骨鶏カレールが出来ました。これを『カレーライスを一から作る』という映画にしました。

一から何かを作る、あるいは何かの根源を探ると社会や世界が見えてきます。例えば缶コーヒのコーヒーがどこから来たかを探ってみる。日本では作れないからエチオピアや南米から輸入している。コーヒー栽培の人達が栽培する前に比べて豊かになったか、森を開発して流通はどうしているか。どんな人達が介在し、一番儲けているのは誰か。徹底的に調べると世界が見えてくる。そういうことが一番大事だと思つています。

昔は書を持って町へ出よと言いましたが、僕は「書をもって町へ出よう」と言っています。子供達の先生は父親や先生ではなく自然なんです。

特に航海で感じたことは自然です。恵みを与えてくれるけど、懲らしめたり悪戯したり色んなことをする。我々がコントロール出来ないのが神様だと思つています。

★質問・・・この星で生き続けるためには？

関野 今僕は「地球永住計画」というプロジェクトを試みています。火星移住計画というのがあって、アリゾナや青森の六ヶ所村に人工的な閉鎖空間を作っています。火星を地球と同じ条件を持った惑星に改造(テラフォーミング)しなければならぬわけですが、それが極めて困難な試みであるとわかってきました。同時に地球の環境がいかに奇跡的かと。他の星にも微生物くらいいるかもしれないけど、これほど多様に生き物が生きられるのは地球だけです。天の川銀河の中に太陽系以外の惑星があることは九十年代から知られてますが、遠くて行けないので交流出来ない。火星移住計画に対して地球永住計画。地球をどうすること

でこの星に生き続けるかを探っています。僕は元々自分で出来ること、自分の足で歩いて聞いて、自分の頭で考えて自分の言葉で表現することをしてきました。足元を知ろうと、大学の近くの玉川上水の自然調査を徹底しようとして生態学者や昆虫学者に協力してもらって、小平市の歴史や信仰、伝説は古老に聞いたりしています。地球永住計画は芸術祭で、アーティストのデザインとして表現する為に、まずは地球を知ろうという段階です。答えが出るかどうかわかりません。

グレートジャーニー展の時も、ロードマップ(※未来予想図)は作れなかった。答えは一つじゃない。答えを出すより地球つて今こういう問題があるの皆さんも考えてくださいという問題提起です。特にITは今後何が起るか分からない。僕は船戸与一という作家が大好きです。あつてきて、彼は最後に『満州国演義』という陸軍史を癡と闘いながら書き、九冊の文庫本の解説者を全部割り当てて亡くなりました。彼は生前もう現代史の小説は書けないといわれた。これから先の世界は本当に予測がつかないと。

ただ僕は孫や曾孫の世代に責任を持たなければいけない。アマゾン狩猟民の生き方の基本は、優しく慎ましくゆったりなんです。その生き方を皆がしていればたぶん地球と私達は生き延びるだろう。万一、現在の何千発、何万発ある原爆水爆が実際に使われても、アマゾンの人は生き残るでしょう。

世界文明が崩壊しても、人類が絶滅するわけじゃない。自然の中で生き延びる人は生き延びる。逆にいえば彼らから考え方を学ばないといけないと思います。

## 関野吉晴さんの

### 文化講演会連載を終えて

神奈川県大和市 永仮まゆり

人類が世界中に移動拡散した五万三千里の軌跡「グレートジャーニー」を逆ルートで辿る。地球と人類史のパノラマ的時空に挑む比類なき冒険。何と気宇壮大な挑戦だろうか。旅の目的は、旅を織物に例え、自分の織物を作ること。経糸は、自分の腕力と脚力を頼りに太古の人々と同じ条件下で、同じことを感じながら行く。横糸は、村々に立ち寄り、そこに住む自然と深く調和をとっている人々と暮らしを共にすることで、彼らの世界観を学ぶ。ゴールを急ぐのではなく、むしろ寄り道を大事にする。これが探検家というものか。

かつて大航海時代の探検や冒険家達は、三つの動機（黄金、栄光、宗教的情熱）を持って未知の世界に飛び込んだ。しばしば帝国主義の尖兵でもあった。

しかし新しい時代の探検は、一個人である関野吉晴さんの新鮮なビジョンから出発する。厳しい

資金繰りに苦労しながらも、純粹な思いに共感する仲間の協力を得、足掛け十年のグレートジャーニーは成功を遂げる。「ひとの意志は気力のうらづけによって行動となる」（法主寸言）というが、グレートジャーニーのプランが「自然と」浮かび上がる母胎は、二十年の南米通いにあった。

1949年、東京の下町に五兄弟の五男で誕生。明治生まれの校長だった厳格な父には何かをやらせ！とはいわれず、やるな！と行動を制限された。やりたいことが抑圧され自分がわからなくなつた。自活を決意して入った一橋大学では探検部を設立、初めての海外が71年、二十二歳の時のアマゾン。「泊めてください、食べさせてください、何でもします」という旅のスタイルだが、言葉も通じない先住民と簡単には仲良くなれない。警戒心の強い彼らから拒絶され、寂しさのあまり大声で童謡を歌う関野さんに、次第に子供達が近づき一緒に歌いだした。いつの間にか大人達も周りを囲み、心が解けあった。

アメリカ社会の裏側といわれる南米は、競争と効率、便利と快適さ、大量生産、大量消費の「文明」国日本の裏側でもあった。時速4キロのアマゾンと時速80キロの東京の時空ギャップを往復しながら、卒業後も旅を続けたいと思う。

何でもしますというものの、何の役にも立たなかった自分を受け入れてくれた彼らに恩返し出来る道を模索、横浜市大に入り直して医師になる。

彼らを学術や研究調査の対象にはしたくない。友達でいたい。そんな関野さんの医療姿勢は、その土地の文化や考え方をしながら必要があれば診療するというスタイル。伝統医療が多い先住民の文化の本来の姿を崩すことはしたくない。

以来、アマゾン川流域で焼畑と狩猟採集の暮らしを営むマチゲンガの一族と、三世代四十年の付

き合いになる。どんな人達とも時間をかければ仲良くなれる。その嬉しさが旅人の醍醐味となり、関野さんのまなざしから映される写真には、私達が失ってしまった何かを呼び起こす人々や自然の美しさがある。

人類が世界中に移動拡散した動機を、好奇心や向上心ではなく、弱い存在が押し出されたことによるとする「グレートイミグレーション（大移民）」の慧眼は、関野さんの感受性ありきだろう。

イスラム教のラマダンは、空腹を経験することです。貧しい人の苦しみを知り救済の気持ちを持たせるといいますが、自然とかけ離れた文明社会の人間の共感共苦のセンサーは、とかくエゴで空気が目詰まりしている。五感を使って生きるリアリティが欠落している。

海のグレートジャーニーでは、太古の物作りを再現。五感を最大限に使い、日本人の海上ルートを三年掛かりで渡つた。今回私も編集をさせてもらいながら旅の途中で亡くなったインドネシア人キャプテンの思いが伝わり思わず涙がこぼれた。

関野さんの足跡は、生きている、生かされているという経験の深みを求める活動にあると思う。

アマゾン狩猟民の生き方が縄文人と通じる一方、この星に救いがたい負荷をかける人類の間も深い。幻滅や葛藤を伴う世界の彼方に真に知恵の働く場所はあるか。自然と共生する先住民の考えや知恵を共有し、我々の中に新鮮な思潮を創造し、活かしたい。

大倭には百七十二万年前に出現したと言われる奇稲田姫命、須佐之緒命が祖霊として祀られている。顕幽不二に古代人達の賑栄う場所だ。多様性を認め仲良く暮らすというシンブルなテーマは関野さんと通じる。また新しい旅や物語をシェアし、交流を深める機会が来ることを願います。

特集 戦後72年……

大阪府四条畷市 清水 御園

生涯の宝である。

## 疎開っ子の思い出と父の「シベリヤ抑留記」

## 第三章 父の生涯

## 第一章 父還る

旧ソビエトからの抑留を終えて昭和二十四年の秋、私が小学校五年生の時に父が帰って来た。親戚の叔母と奈良県吉野郡下市の千石橋の袂で待っている間もなくコツコツと靴音が聞こえた。

「あっ、お父ちゃんや」

四歳?の時に別れて記憶に無い父であったが直感した。橋は緩やかな太鼓橋になっていて帽子が見え、顔も見え、橋の真ん中で全身が見えた。私の姿を見て勢いよく走って来て、「御園が大きくなったな」と髪がぐちゃぐちゃになるまで頭を撫でてくれた。涙が溢れ気恥ずかしく叔母の背中に回って泣いた。満月が煌々と映える田舎道を父に手を引かれて、母の待つ家へと向かった。途中で何度も何度もギューッと手を握られて痛かったが、その感触は今も残っている。

## 第二章 さようなら

父が復職し、私達の転居も決まり、いよいよ大阪へ出発する当日、母はお世話になった親戚の方々へ深々とお礼を申し上げていた。思えば出兵の留守家族を七年もの間よく面倒を見て下さった。その後母の口癖で、皆さんの恩は生涯忘れないように、大きくなったら恩返しをするようにと言うのを、充分ではないが事のあるたびに心を寄せて来た。

学校が近づくにつれこの地を離れるのが辛くて

逃げだしたい思いであった。その時、大きな声が聞こえてきた。「わー、みそのちゃんが行くー、さようなら、また帰っておいでやー、げんきでなー」と。クラス全員が校庭に出て見送ってくれた(一年から六年までの持ち上がりで一年年二十七、八人であった。男の子、女の子関係なく皆とても仲が良かった。それだけに別れが悲しくて悲しくて、荷物の陰で泣いた。大阪へ着くまで泣いていた。その別れが後の私の心に後悔の塊となった。あの時にさようなら、また帰ってくるな、ありがとう、と何故言えなかったのか。言えないほど悲しかった。

その後の五十年間、田舎の暮らしを思い出すにつけて後悔を持ち続けた。ある日、クラス会の連絡が来た。私は入院をしていたがドクターに無理を言って、三日の許可を得て吉野へ向かった。この機会を逃すと今まで持ち続けていた悔い、あの時に皆に与えた失望、失礼のお詫びを言わないと、との思いが私を駆り立てた。

懐かしい顔、嬉しくて抱き合い泣いた。そして思いを込めてお詫びを言っていると胸が詰まってきた、私も皆も泣いた。「みそのちゃんは黙って行ってしようた」と覚えていた人もいた。最後に級長さんが、今日の一番の収穫はみそのちゃんの話やっただと言ってくれて大きな拍手をもらった。あれから十五年、一人、二人と亡くなったとの噂も聞く。その人の顔が浮かんでくる。私は今も当時を語り合える友がいる。病気を押して出席した甲斐があった。疎開っ子の私にはかけがえのない七十年であり、大きな影響を与えてもらった。

小学校六年生の新しいスタートを迎えた。父が復員して半年が過ぎた。田舎で自然の中で伸び伸びと育ち、親戚の人達にも可愛いがって頂き、私はまだ幼かった妹の面倒も良く見て母の助けもした。母は優しかった。

明治生まれの父は厳格で、そのギャップもあり距離感は埋められなかった。戦火のもと命を賭して闘い、四年もの抑留の中で、家族の待つ祖国への思いを募らせて必死で闘って来たのであろう。敵しかったのも無理はない。何でも器用にこなし、

いつも辞書を開いていた。新しいことに好んで挑戦もしていた。よく歌をうたっていたが軍歌だけではないことがなかった。戦地のことを思い出すのも嫌だったのだろう。戦争のことも話さなかったが、唯一度だけ、戦争ほど無惨、残忍、過酷なものはない。差別や虐待ばかりだ。戦争は「いかん」と強く言うのを聞いたことがある。

昭和三十五年、誰から見ても頑丈な体を病気がおそった。過酷な戦地での影響だった。その五年後、五十七歳で逝った。私は父の歳より二十年長く生きているが、何も残せていない。父は「シベリア抑留記」と言う体験記を遺した。今はこの体験をした方々もごく僅かとなり、世が移るにつれ語る人もいなくなる、よく残してくれたとしみじみと父を憶い、文章で残す大切さを教えられた。

\*

父の遺稿を取り上げて下さるお話を頂いた時、私は胸が熱くなりました。昭和二十七年父の勤務先の機関誌に投稿してより、本箱で眠ったままでした。父が命を削った闘いの記録で魂そのもので

す。皆様の目に触れることで父への大きな供養になり、私自身も少しは父への孝養ができたかと、『とおやまと』編集部に心より感謝申し上げます。

シベリヤ抑留記

## 共産主義社会の実体

岩崎 治助

昭和二十年八月九日、ロシアは日本に宣戦布告して来た。闘いの不利は我々によく分っていたが、命令の為、部隊は羅南の陣地で頑強に抵抗した。空爆は時間を追うにつれ烈しくなり、敵の重戦車は周囲から陣地に向って猛烈に打ち込んで来る。ロシア自慢のカチュシヤ砲だ。ドイツの戦車は此のカチュシヤ砲に相当痛めつけられたと聞いた。成程後でよく見た時、頑強な戦車だった。日本の兵器は問題にならぬのがよく判った。

愈々部隊は夜中十二時に退却する事になった。道なき山中を地図と磁石で塩津の温泉へ出た。昼の十二時だった。ここで姿を隠して二、三時間休憩し、又出発。朝方着いたのが魚遊洞、此処に於いて停戦命令を受けた。

無条件降伏なら京城まで逃げるが、停戦講和と聞いて誰一人として逃げる者もなかった。まもなくロシアの軍使が二名来た。部隊長、将校、全員集合。使者は「あなた達は、戦争が終ったのだからすぐ日本へ帰れます。取敢えず兵器を全部纏めて此の所に置いて下さい。そして古茂山に日本の兵隊さんが集結して居るから全部此処まで来て下さい」。部隊長、将校等は大笑した。だが我々は不安でたまらないが、兎に角古茂山集結地に来た。あくる日、鉄条網で張りめぐらされ、まんまと一杯掛った事に気付いた。こんな事だったら京城まで逃げた方がよかったと思った。

それから三ヶ月、何んにもせず遊んだ。三ヶ月後、清津の波止場で戦利品の積込みをやらされた。処が、品物を見る度に呆れて物が云えなかった。腐った枕木、茶碗、箸、ガラスの破れ、団扇、便所壺、紙屑、布巾屑、紋付、女の寝巻、子供の着物、開いた口が塞がらない。よくもこんなに掻き集めたものだ。まだまだたくさんあるが、三ヶ月の間凡ゆる物を積込んで了った。

愈々これで我々も帰れると思つて心待ちに待った。突然出発命令で汽車に乗せられた。これがシベリヤ行きだった。着いたのがオロシロフ、確か元の尼港と思います。

大正七年、尼港惨劇で多くの同胞が虐殺された。我々の先輩がシベリヤ出兵で尼港へ来た。此のオロシロフに古い日本建ての家が一つ残っていた。年寄りのロシア人に聞けば、三十年前に此処に日本人がたくさん居ったと云っていた。

我々も共産党の国で働く事になった。処がキラモウフ少尉の云う事がふるっている。「君達はよく働けば日本へ早く帰す、また増食も(今)以上に貰える、金も出る」、これがキラモウフの第一声だ。処が日本人は外国の事に余り(に)無関心であった為、すぐに真に受けて了う。その揚句何一つとして出たものがない。又一杯掛けられた。

こうして一年は過ぎた。訪れるものは寒さと飢餓と重労働。体は疲れと衰弱の為、フラフラして目眩がする。我々は只生きている人間だ。精神力も魂も抜けた人間だ。我々はロシアからこんな惨酷な目にあわされる理由がない。「暁に祈る」は人間同士の締め合いだが、真綿で首を絞められるように僅かマツチ箱二ツ位の大きさのパンと塩汁二合にトマト一つ食わされ、零下三十余度の吹き晒しの路でスコ(ツブ)とツルハシを振り廻し、血を吐く思いの労働だ。こうした日が毎日続くうち

弱い者は次々と死んで行った。

第二年目が訪れた。シベリヤの冬もどうやら過ぎ、暖い五月が訪れた。天は我々を捨てなかつた。待つて居た草木も次から次と伸びて、我々の空腹を満たしてくれた。食える草はどんな草でも食った。又毒草を食つて死んだ者もいた。山田と中川は死んだ猫の肉を食つて二人とも死んだ。蛇や蛙は日常のめしと同じ気持ちで平気で食っている。

収容所の宣伝係モロボフ少尉は「お前たちは捕虜であっても、我々の同志であるからロシア人と同じだ。だから待遇も同じで差別はしない」と。

「糞、何が同志だ。何処に差別がないのか。又どうして同じ待遇か。夜も昼も我々の生き血を吸いながら、よくも左様な事が言えたものだ」

私が作業の近くの民家へ這入った時、マダムと子供三人がペーチカの縁に居た。這入った途端、ナアーンだ、汚い家だな、まるで動物の住居だ。家の中には何一つとして道具もない。只寝台が二つあるだけだ。余りの意外さにと凝視した。

マダムはニコニコしながら「何の用事かね?」、「イヤ、寒いから手足をアブラして下さい」と早速ペーチカへ手を当てた。火は消えていたが余熱で暖かった。マダムは「ヤッポン、子供あるか?」、「ある」と答えた私は、マダムに「此の三人の子はマダムの子か」と尋ねると、ウンと頷いた。

見れば、此の寒いのに三人共薄いペロペロの服一枚だ。子供が可愛くないのかしらと思つた。「マダム、お前は何処で寝るか」と聞けば、寝台を指さし「あすこだ」、「ウン」、併し寝台二つで

どうして寝るのかしら。一つはマダム、一つは夫だ。一人しか寝られん寝台で二人も三人も寝られる筈がない。どう考えても寝られない。子供に「お前は何処で寝るのか」と聞けば、土間だ。ナニ、土間?と私は暫く呆然とした。其の代り夜具

はたくさん着るだろうと思って尋ねると、土間の隅に毛布一枚置いてあるのを持って来て、「これで三人寝るんだ」と。愈々呆れて了った。零下何十度の極寒でよく生きて居れると不思議がった。寝台には部厚い綿の入った蒲団が両方に置いてあった。これで夫婦はぬくぬくと寝ているのかと思つた。

一番上の十二になる子供に「学校へ行っているのか」と尋ねると、「行っている」と言つた。併し日曜でもないのに居るから、「今日は休みか」と聞くと、「靴がないから行けないんだ」、「じゃ買って貰えばいいじゃないか」と言えば、「お金がないんだ」。成程家の中の様子を見れば無理な位と思つた。彼等は其の日暮らして現在自分等の食うのに追われている有様だ。いくら子供の有る女でも働かなければパンの配給はくれない。チケツトは呉れない。

七十二才になる大工のお爺さんが、いつか言つた事を思い出した。其のお爺さんにも男の子が一人有つた。其の子が成人すると、政府が徴用してモスコの方へ連れて行つた。其の子は永久にお爺さんの許へは帰つて来ない。お爺さんは涙をポトリと落した。私は何か悪い事でもしたのかしらと思つていたが、そうでもない。これは共産主義の制度だ。ロシアの制度は一人前になれば親を見なくてもよい。其の代り老衰しても政府が見てくれると言つていた。

私はお爺さんに「政府が見てくれるのだつたら働かなくてもよいのではないか」と云えば、「イヤ、いくら年をとつても働かなくては食えないのだ。政府の保証してくれるのは僅かだから、とても生活は出来ないよ。又お金を貯めると違反になつて取上げられて了う。こんな国では実際楽しみがないよ。ツアー制時代のロシアがずっとよかつた」と涙を流しながら述べた。「併しこんなことを云うと、すぐにゲーペーウー（共産黨員）が来て何処かへ連れて行つて了う。そして厳罰にされる。だからロシア人は政府の事は一切言わない、お爺さんは斯う語つた。

今思い出して、此の三人の子供を眺めた時、額ける処があつた。子供が一人前になつても親を見つてくれない。たくさんあれば生活に困るし、産んだ以上仕方がない。どつちかと云えば子供なんかどうでもよい、大きくなるのは勝手だ、死ねば死ねだ。

そこへ山中隊長が這入つて来た。「なんと汚い家だな。よくこれで生活しているね。まるで豚小屋だ」。早速私は「動物の住居と変わりありません」と言つた。

これが共産主義の真実の姿です。捕虜新聞には、搾取なき自由の国とか、或いは平等とか云つていますが、全く出鱈目ですね。これ以上長居は無用、体も暖まつたので、「マダム、有難う」と云つて出た。

第三年目を迎えた。民衆運動も次第に猛烈になつて来た。共産主義社会は世界の民族の自由と幸福と平等が共産主義だ。共産主義国家になれば失業者もなければ餓死者もない（ない筈だ。働かぬ者はどしどし監獄にぶち込んで強制労働をさすからだ）。又搾取もない、世界の民族が幸福に豊かに暮らせる、これがマルクス・レーニン主義だ（どこにマルクス・レーニンが理論通りな国家を作っているかと言つてやりたい）。

各収容所には民主グループが出来、反ファシスト委員を組織して共産主義国家を唱え、各アクチブールに指示する。各アクチブールは誰が反動か又日和見分子かを調べて、反動分子は追放したり吊し上げをやり、日和見分子は大衆より非難罵倒

される。こうして嫌でも応でも引きずり込んで了う。又赤旗を振りながらスクラム組んで大声で唱いながら歩く。歌わない者は反動だと罵られる。私は度々非難されたが、飽く迄も字が読めないから歌が覚えられぬと弁解した。これにはアクチブールも手が出せない。何処までも押し通した。

こんどは字の読めない者はばかり集めて毎晩講義だ。聞きたくないが、行かなかつたら反動分子として吊し上げられる。また帰国に支障を来たす。あの手この手で教育する。ロシアの政策が理論通りやっているなら喜んで共鳴するが、実質と理論は正反対だ。自由もなければ平等もない。搾取は以上（異常か？）に酷く、民族は奴隷だ。目的が達せられなければ手段を選ばず破壊するのが共産主義だ。宣伝は非常に上手だが、裏面には恐ろしい計画が有る事を知る。此の宣伝に乗せられて帰国する者が大分あるのが嘆かわしい。

私は断言する。共産主義国家になれば、家、土地、畑、工場、船舶、運輸等は政府が全部取上げて、国民は皆んな政府の下で働かなければならぬ。働かない者はどしどし監獄にぶち込んで強制労働をさす。共産主義国家の裏面はこれだ。民族は奴隷で牛馬の如くコキ使い、何一つとして楽しみなく、只働いて食うだけの能だ。発展も向上もない。斯んな国の真似は我々はしたくない。

併し全部悪いかと云えば、そうでもない。善き処もある。何処かと云えば、我々の体験した中で、人を殴らないのがよき所だ。これだけは真似するが、あとは全部零だ。

繰返して云う。共産主義社会は「嘘と搾取、無情と奴隷」、これが共産主義社会の実体だ。苦闘四年間の体験を此処に記して終る。

※一部、現代かなづかい・常用漢字にしました。

あじさい日記

7月12日 藤本宏秋さん(京都府宮津市)が、甲野善紀さんに紹介されたという唄と舞いのキリロラ女史(東京)と来邑。

7月15日 大倭神宮月次祭。午後、交流の家でFIWC定例委員会。先月のハンセン病フォーラムは500人の会場がほぼ満席の盛況とのこと。韓国キャンプは8月12、21日の予定。

7月16日 石垣雅設・清水夫妻(静岡県袋井市)と息子の祥彦さん、出口三平さん(京都府綾部市)が来邑、李章根・杉本順一さんと歓談。

7月19日 山口にはらさん(奈良市)が大倭墓地の高杉一空さんのお墓参りのため来邑。

7月21日 昭和38年の東大阪朝鮮第5初級学校の校庭整備の時からFIWCキャンパー、金清・順子夫妻と娘さんが来邑。

7月23日 大倭大本宮月次祭。この日は平成6年7月の法話をお聞きしました。本紙平成22年7月号に『比』と『登』が一体となつて』として掲載分。

午後4時から大倭会館で大倭会役員会。東光大祭・祖霊祭準備の大掃除、一泊文化行事や文化講演会等々が議題でした。

7月27日 拝殿のエレベーターの6ヶ月点検をしました。昇ちゃんの家の今後の活用のため、まず大倭殖産に点検してもらいました。

7月28日 捨石の会に、中野泰宏さん(関西棋院九段)が奥さん(麻由美)と生後3ヶ月の将里

君を伴われて大倭会館に一泊。8月1日 大倭病院開院記念日。守護霊である東山坊大善神に対し教長さんが感謝のメロ接拶をされました。

8月6日 大倭神宮月次祭。この日、冬崎流峰(埼玉県蓮田市)・上野幸夫(大阪府堺市)

さんが来邑、岸田哲・林修三さん達と歓談された後、神宮の月次祭にも参加されました。夜、大倭会館で邑倭の会。

8月6日(午前8時15分広島)及び9日(午前11時2分長崎)原爆投下の時刻に、拝殿の大太鼓が中島健さんにより打ち鳴らされました。

8月7日 台風5号接近のため夜の編集会議中止、9日に延期。大倭安宿宛では

8月5日 平成23年は創設者である矢追日聖師生誕百年、法人成立五十五周年でした。その記念事業として改築が計画された、新救護施設「須加宮寮」の竣工式・祝賀会が10日より開催されました。仲川げん奈良市長をはじめ約100名の方のご出席の下、台風が接近しているにもかかわらず、お天気にも恵まれ無事13時半に終了しました。各施設でもお祝いのご馳走で心を一つにしました。

(竣工式に先立ち7月29・30日に内覧会が行われ、各施設の住苑者・邑人他、関係の皆さんが見学されました)

表紙写真について

▼奈良県川上村井光にある「御船の滝」は滝高約50メートル。静寂な谷をしばらく登っていくと、2段に分かれて水が勢いよく流れ落ちる勇壮な姿に出会って心が躍ります。その滝つぼの上に見事な虹が浮かび上がっているのを見つけて井手さんがシャッターを押しました。▼自然観察のために2人で吉野の谷によく歩きに行くのですが、へびやカエルなどの生きものの生態や、こうした水や光の変化など、新鮮な自然の姿にいつも感動させられています。(岸田哲)

あんない

\*東光大祭及び祖霊祭 9月5日(火) 左欄に詳細。

\*月次祭(大倭神宮) 9月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第584回観会 9月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\*月次祭(大倭神宮) 9月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大倭大本宮) 9月23日(土・秋分の日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

東光大祭 祭典のご案内

平成29年9月5日(火曜日)・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして

東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭のあいだ拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花色の記録映像等を聞いたり見たりしていただきます。

第336回大倭会文化行事

秋の旅行のご案内 平和を祈る場所、広島へ

日時 平成29年10月29日(日)・30日(月)

集合を正午ごろ広島駅とします。

行程 貸切バスにて各所訪問、

(一日目) 平和公園 平和記念資料館 シュモアハウス 江波山気象館

(二日目) 厳島神社 尾道「千光寺公園」 福山駅にて解散にします。

宿泊 安芸グランドホテル(宮島口)

費用 約3万円

集合場所・時間など詳細は9月号でご案内します。

世話人 湯浅芳郎 090-6987-5847 溝口富士男 080-3101-1639